説教20210627　申命記15：7-11　マルコ5：21-24、35-43

「手を大きく開いて」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

今日の新訳の聖書箇所は、端的に言えば、命の与えぬしである主イエスを門前払いにした人々が、その大いなる罪に気が付かないまま、その主イエスを嘲笑い、そののち主イエスの正体に気づいて、恐れ驚き我を忘れたということであります。つまり、人々は主イエスの存在を実に軽く見ていたのです。確かに主イエスは方々で奇跡を行い重い病の人々を直してきたので、能力のある医者の様には見られていたでしょうが、社会的に見れば一介の旅回りの渡世人に過ぎなかったのでありましょう、もう自分たちの役に立たないのなら、さっさと縁を切ったってなんの支障もないし、そのほうが今後の面倒にもならないだろうなどと思って人々は主イエスを追い返したのです。

　私たちは、今、解き明かしたようにこの聖書箇所を理解していたでしょうか。実は私自身も今回、この箇所を黙想していくうちに、今申し上げたようなことに気が付きました。これは憶測に過ぎませんが、皆さんも私のようであったのではないでしょうか。

　主イエスを追い返す、ということは私たちが命を受けられなくなる、実に的外れな大きな罪で在ります。しかし、私たちは、そんな大きな罪を目の当たりにしても気が付かないような、実に鈍感な存在になっています。今日の聖書箇所を読んでも、その大きな罪に気が付かない理由というのは、一つにはそこに記されている言い回しにあるでしょう。

5章35節「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう。」

日本語では謙譲語というのでしょうか、こんな丁重な調子で言われれば、私たちはすぐにだまされてしまうかも知れません。この言葉はあたかも相手を建てているように聞こえますが、実は、こういった人々の本心は、ただ、言葉を取り繕って、体よくお引き取り願おうといいうのが、実のところだったでありましょう。もとのギリシャ語ならもう少しストレートに言っていて「先生！あのお嬢さんはなくなりました、あなたはもう悩まなくていいですよ」と、もうちょっと素直であります。

まあ、これは口調にもよるでしょうから、この時の情景をありのままに再現することは出来ませんが、いずれにしましても指摘できますことは、このときもはや人々は、主イエスを必要とせず、自分の思いや考えや計画により頼むことに切り替えたということであります。

現代は、自己愛性人格障害の時代だと言われます。この自己愛というのは人間が生まれ持つ性格ですので、それはもうアダムの昔からあったでしょうが、現代はそれが高じてしまっているといいますか、蔓延していまして、しかも医者による確たる治療法もない様ですので、実に悩ましい事態となっているように思います。この自己愛というものは誰一人逃れることの出来ないことで、自己愛が増長し、自分をひたすらほめたたえるようになると、私たちは、周りから切り離されて、孤独な世界へと陥ってしまいます。

　私たちは、私たち自身をほめたたえるよりも、主イエスをほめたたえることのほうが全く幸いであります。私たちがほめたたえる先が、どこにあるかというのはとても大事なことです。

　今、受洗を考え、神の民の一員になることをお考えの方は、是非一日も早く受洗されますことをお祈りいたします。洗礼を受け聖餐を受けることによって、私たちは心からそして体を用いて、主イエスをほめたたえることができる者へと変えられます。私たちを悩ませる自己愛、自分をほめたたえることの辛さから逃れていくには、教会につながり、自分自身が主イエスのものとなることが大事であります。

　クリスチャンになれば、私たちは人の死に際しても、その時に臨んで、手を大きく開いて、主イエスをお迎えすることが出来るようになるでしょう。人はこの地上での生涯を終えて、天の主なる神の身元にあげられます。そして、最後の時に入れられる神の国を待ち望んでいますが、その歩みは、今のこの地上での歩みに続くことであります。私たちは、出来るだけ早い時から主イエスと共に歩まされるほうが幸いです。ただし主いえすに出会うタイミングは人それぞれで、それがいつ訪れるのかは、人にはなかなかはかり知ることが出来ません。

今日、この説教を聞いている方々も、いろいろと主イエスについて思いをめぐらしておられることでしょう。命の与えぬし、人は死んでも生きる、その命を与えて下さるのが主イエスです。まだ信じておられない方は、是非、日本語の謙譲語の世界をしばし離れて頂きたいと願います。この時「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう。」と人々が言ったのには、これからは自分たちのしきたりによって、葬儀を執り行うから、あなたの出番はないですよ、という意味合いもあったでしょう。主イエスがいない葬儀というのは、どういうものでしょか。その一端が38節に記されています。「人々が大声で泣きわめいて騒いでいる」とあります。ここでは故人との別れに際して雇われた、泣き女や泣き男の鳴き声も響き渡ったことでしょう。当時の葬儀では、このような職業的な泣き女や泣き男を雇うのがしきたりだったのです。

クリスチャンなら、主イエスにある慰めや喜びを知っていますので、その深くて静かな慰めによって、本当に癒されることが出来ます。しかし主イエスを知らないならば、やはりこのような泣き女泣き男を雇って、その場限りの慰めの場を演出するしかないかも知れません。

主イエスは少女の手をとって「たりた　くむ」と言って少女を起き上がらせられました。これを見た人々は驚きのあまり我を忘れた、と記してあります。この人々の驚きというのは先週あらしと大波を一声で静めた主イエスの出来事と重なってきます。あのあらしの時も主イエスは弟子たちに「なぜ怖がるのか、まだ信じないのか」と言われました。そして今日は会堂長に向かって「恐れることはない、ただ信じなさい」と言われました。実は主イエスが人々に伝えたかったのはこの「恐れることはない、ただ信じなさい」ということだったでしょう。主イエスは人々の前で奇跡を見せられましたが、その奇跡に人々が驚きこころ騒がすことは主イエスの本意ではありませんでした。主イエスはただ人々が主イエスを恐れ、主イエスを信じる確かな信仰を持つことを願ったのです。ですから主イエスは

このことをだれにも知らせないようにと厳しく命じられ、人々が主イエスの奇跡を見た、といって浮かれ騒ぐことを厳しく戒められたのでしょう。そして、かわりに人々に「食べ物を少女に与えるように」という現実的で日常的な指示を人々に与えられたのです。

　私たちは会堂長ヤイロの家で行われていたこの葬儀の席での、この主イエスの出来事から多くを学ぶことが出来るでしょう。私たちはこの世的にはすべての終わりであり永遠の別れであるかのように思われがちな、この地上での死という出来事が、それがただ私たちの思い込みによることであることを、今日の聖書箇所から主イエスによって教えられるでしょう。

さて、私たちは主イエスに向かって決して拒絶せず、手を大きく開くことの喜びと救いとを知らされましたが、この手を大きく開くという言葉は、今日の旧約聖書の箇所からとってきたものです。旧約聖書では「手」という語句は神様の救いの御手、万能の御手と言った意味合いもこめられていて、大変含蓄のある語句であります。貧しい同胞に私たち人間が、手を大きく開くいていくということは、神の救いの御手が実際に差し伸べられて、この世で神の救いが一つ一つ実現していくという意味合いが読み取れるでしょう。私たちは貧しい同胞を見捨てず、彼らに必ず与えなさい、と主なる神は言われます。そして与える時に未練があってはならないと、言われます。与える時に未練がある、という態度には、今日の新約聖書の箇所で人々が、主イエスから受けることを遠慮したという態度に共通する心境が伺えます。つまりどちらも主のことを思わず、自分の思いや考えや計画により頼むことに切り替えているということであります。7年目の負債免除の年が近いから、今は貧しい人に与えるのはやめておこう、延期しよう、という考えは全く自分の側の計画で在り、目の前の困っている貧しい同胞の姿を見ていないということでしょう。このような私たちの態度を主なる神は罪に問われる、と聖書には記されています。

まず自分ありきの現代に照らせば、そのようなことで罪に問われればたまったものでないと多くの反論が寄せられそうでありますが、私たちは務めてこの聖書の言葉を聞いて肝に命じる必要があることでしょう。

私たちはこの、貧しい同胞を見捨てず、彼らに必ず未練なく与えなさい、という御言葉を単なる人間的な道徳的教えとして受け取るのではなく、主なる神の優れた、喜びに満ちた私たちへの戒めと受け取ったほうがよいでしょう。

そのことは、次のようなことからもうかがい知ることが出来ます。申命記１５章８節「彼に手を大きく開いて、必要とするものを十分に貸し与えなさい。」に必要とするものという語句が記されています。如何でしょうか、私たちが人に与える時に、彼が必要とするものを知ることが一番難しいのではないでしょうか。つまり私たちは他の人の思いや考えを知り尽くすことは出来ませんし、出来るだけ必要とされるものを慮って、それを選んで与えているのです。現代の人なら、それならば、お金という便利で万能なものを与えれば一番無難でよろしいのではと言われるかも知れませんが、主なる神の御心はそういうこととは全く違うのです。

相手が本当に必要とするものを与える、には、その相手のことを絶えず覚えて祈っていることが不可欠であるでしょう。例えば目の前に3日間も飲まず食わずの人が現れれば、彼に今必要なもの、すなわち食べ物飲み物を、今そこで与えるのは容易ですが、生活困窮家庭と言われるご家族の子供に、何が今必要で、何を与えるのがよいかということは、家族関係や国の制度等もろもろの要素が混在して、いつも祈りに覚えていなければ、何を実際与えればよいのかは、実に難しいことになるでしょう。

最後に主イエスの御言葉を全員で味わいと思います。この世ではなんの後ろ盾も持たず、渡世人のようであった主イエスが、実は私たちを統治する王であることを告げ知らせるために、主イエスは次にように言われました。『はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

私たちは、主イエスを追い返すことなく、又小さく貧しい隣人を見捨てることのないよう、いつも主イエスの御言葉に聞き従いつつ、手を大きく開いてこの地上生涯をまっとうしていきたいと願います。

いのります

天にいます

私たちは、あなたを恐れ、従っているようで、実はあなたを軽く見て、門前払いをするような愚かな者です。どうかそのような私たちの罪をお許しください。

あなたが私たちに日々恵まれる恵みを、手を大きく開いて受け取っていくことが出来ます様に。

そして私たちが隣人にも又、手を大きく開いて彼ら彼女らに惜しみなく与えていくことが出来ます様に。ことに、今、この世で打ちひしがれ、孤独に悩む方々にあなたの祝福と恵みが与えられます様に。　　その御業の為に私たちが用いられ、その手を働かせることが出来ます様に。

世を去ったものと今なお世にあるものを治め守られる主よ、どうか私たちに、今は世を去り天に挙げられた方々を 思い起こさせてください。あなたは、この地上生涯の最後の時も、また天にある生活の始まりも、すべてをご存じで、必要な時と場所を備えて下さいます。どうか全能であり命の源であるあなたに、私たちがますますより頼み、すべての人と共に永遠の祝福のみくにへと導かれますように。

ことに、天に召され１カ月がったった、猪股修兄弟のことを覚えさせてください。彼を祝福し、みくにへの一歩一歩を豊かにお守りくださいます様に。

父と聖霊と共に